

なかま

若鳥に 雁の司令官 油断なし
秋風は 憎悪の連鎖 消してこい

行事予定表

- 8月24日 コンクール締切
8月30日 (土) 土曜日授業 (算数・数学なし)
読書感想文コンクール締切
9月7日 JASL と ADULT 秋季授業開始
総務オフィスミーティング
9月14日 21日 運動会予行
9月14日 前田先生講演「アイビーリーグの入り方」
9月28日 運動会 (雨天10月5日) 前期最終日

一言の励ましに救われる

自分一人だけだと思い落ち込んでいるときに、心細くて耐えられない時に、私に声をかけてくれる人がいて、立ち直ることができた、という経験のある人は多いはず。

日本の学校では、周りの視線を気にして、声をかけたくてもかけられなかったという人もいますが、友だちが困っている時に声をかけてあげられる人は、本当に勇気がある人だ。

そんな勇気のある人を見ると、本当に嬉しくなる。そんな勇気のある人がたくさんいる学級はきっと居心地の良い所に違いない。

周りの視線を気にしないで、自分が正しいと思うことを貫く人でありたいと思う。

お母さんがんばれ！

今年は例年になく8月からの入学者が多くなりました。子どもたちの緊張した顔が、大きな笑顔になる日が少しでも早くくることを願っています。

お父(母)さんは仕事が大変ですし、子どもは学校に慣れるために懸命です。本当はお母さんも大変なのに、お母さんまで「大変大変」と言っていたら、家族みなが大変になります。特に子どもは耐性が大人に比べて弱い場合が多いので、お母さんが元気ではずつとしていれば大いに安心でき、その結果不安を最小限度に抑えることが可能になるでしょう。

子どものことを気にかかけつつ、お母さんが元気で意欲的で前向きで楽観的であることが、一家みんながうまく進む第一の条件だと思っています。



プリンストン日本語学校新聞



平成26年度 No.14号

平成26年 8月24日

文責 長尾重範 nagao@pcjls.org

「宮沢賢治」ってどんな人？ (14) 芝崎雅行

仏教の背景 (3)

賢治が、「歓喜して身体がふるえて止まらなかった」という法華經の第16章「如来寿量品 によらいじゅりょうほん」は、法華經全28章の山場になっているのだけど、その前の第15章「從地湧出品 じゅうじゅつほん」では、その最大のクライマックスを盛り上げるため、大掛かりな舞台仕立てがあるんだよね。それは、釈迦の入滅後、法華經の伝道主体者として、「無量千万億」の菩薩が、大地から、うじゃうじゃ湧き出てくる場面が設定されている。この面々は、シャバ世界の下にある虚空の世界にずうーっと長い間、住んでいて、釈迦仏の声が聞こえたんで、地上に湧き出てきた。僕は、このイメージから、去年NJにうじゃうじゃ出現した赤眼の17年蟬のことを、迂闊にも思い出してしまい、どうもそのイメージを頭から払うことが出来ないでいるんだけど。

第16章、舞台(須弥山しゅみせん)中央の釈迦仏のまわりには、もともと、例のごとく、天文学的な数字の聴衆が取り囲んでいたのだけど、そこに新たに信仰の強力伝道蟬、じゃなくて、伝道法師も加わって、お膳立て完了。進行役の弥勒菩薩(みろくぼさつ)の質問に応じて、釈迦仏が久遠の生命について語り始める。。

とまあ、その「久遠仏」の内容を僕が書く資格は全くないし、僕の関心は、あくまで、賢治がこの第16章のどこに「歓喜して身体がふるえて止まらなかった」のか、という一点にしかないんだけど。。僕が発見したことは、法華經とは、恐ろしくファンタジックでスペクタクルな劇的舞台だったということ。幼い頃から、いわば、真面目に浄土真宗の仏教教育を受けてきた賢治としては、驚きの読書体験であった、ということ、少なくとも言えるのではないかと。

法華經遭遇後の信仰アツアツ時代に、生涯「ただ一人の親友」保阪寡内(ほさかかない)に賢治は出遭う。法華經との出会いと同等、あるいは、より重要な出遭いであったことは確かなんだろうと、僕も思う。先走ってしまえば、賢治は、保阪寡内に、法華經の信仰を共有し「諸ともに」歩んで行くことを、強く、何度も執拗に、諦めずに求めた。

ジョバンニ「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸(さいわい)のためならば僕のからだなんか百ペン灼(や)いてもかまわない。」(『銀河鉄道の夜』)

ちなみに、この自分を焼いて人々の幸いを願う、というのは、法華經第23章「薬王菩薩本事品」から採っていたのね。